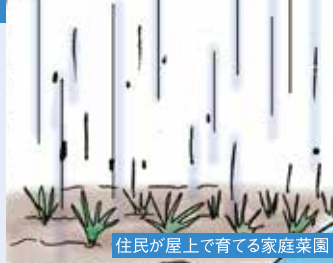


学生部門 審査委員特別賞

安間 理子・小澤 光理

北海道大学大学院

【作品名】
はだかにつながる
水みずしい暮らし

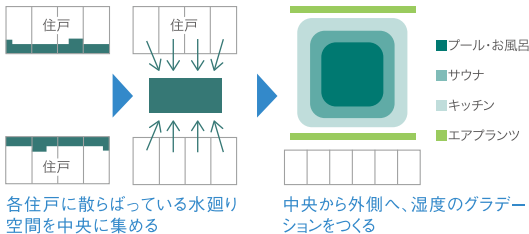


住民が屋上で育てる家庭菜園



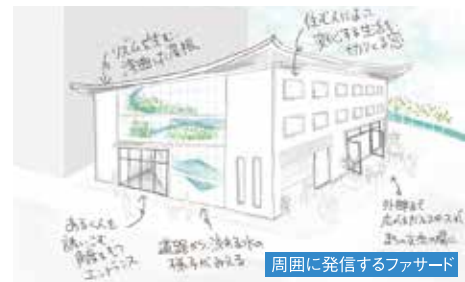
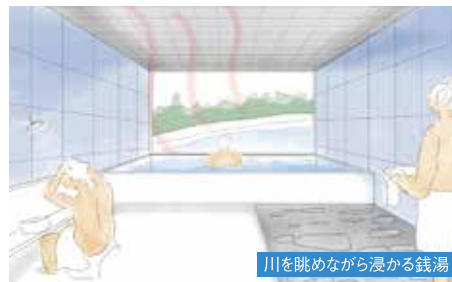
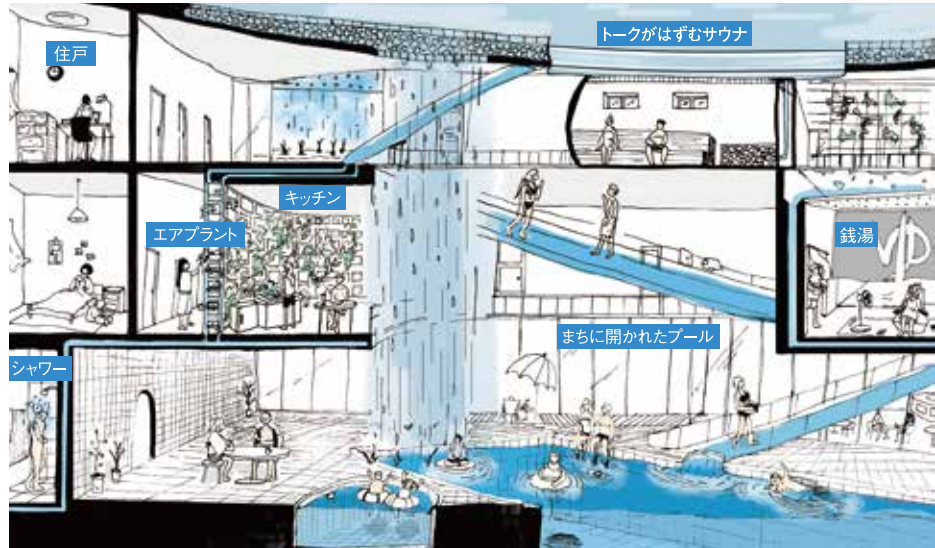
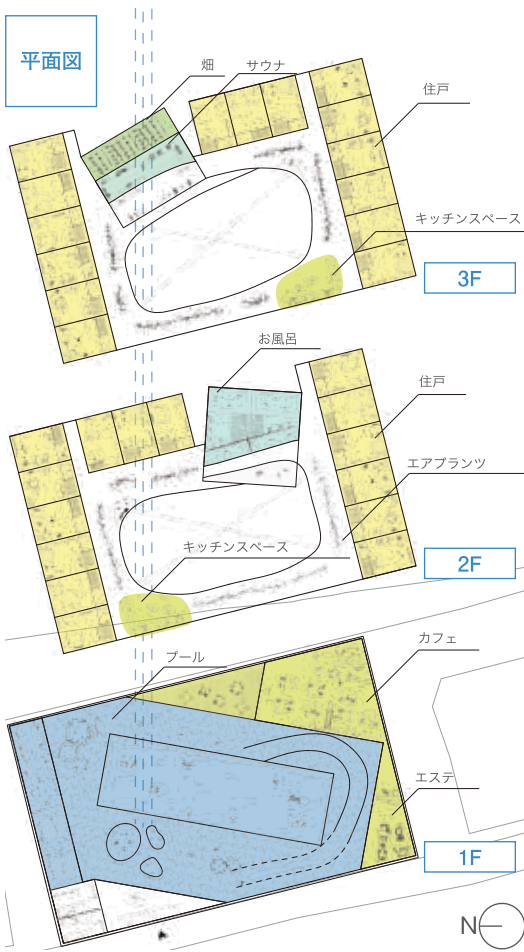
キッチン&湿度を調整するエアブラント

ダイアグラム

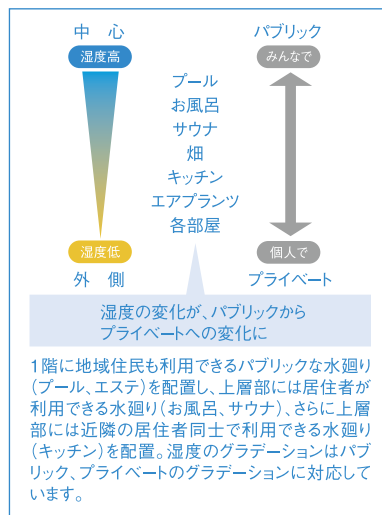


人間の60%を形成する「水」。はだかの付き合いを形成する共用空間では湿度を保つことが重要です。水廻りの空間を中央を集めることではだかを許容する湿度のグラデーションを、建物内に作ります。

平面図



湿度のグラデーション



設計コンセプト

近年、日本で暮らす外国人の数は増加しています。集合住宅やシェアハウスにおいても、隣の部屋に外国人が住んでいることがあたりまえようになってきました。しかし、言語や文化の異なる人々が互いに打ち解け合うのには時間がかかります。そこで、言葉のいらない「はだかの付き合い」に着目しました。海外でもフィンランドのサウナやヌーディストビーチなど、はだかの付き合いは存在しています。多国籍の「はだかの付き合い」によって、縮まった共用空間における体の距離が、お互いの心の距離を縮めていくようなシェアハウスを考えました。空間操作として行ったのは、各住戸に散らばっている水廻りの空間を共用空間として建物中央に集め、プールを中心とした

湿度のグラデーションを作ることです。人間の約60%を形成する水の空間を建物中心に集めることにより、はだかを許容する空間を作り出します。湿度のグラデーションはプール・お風呂・サウナ・キッチン・各住戸へと広がり、その変化によって利用の仕方もパブリックからプライベートへと変化しています。シェアハウスは、雨水をろ過する屋根から始まり、建物全体の機能をまわりながら最後はプールへと流れていく水の流れを可視化させることで、建物自体もはだかの建築となります。大きなガラス張りで周辺地域へと発信されたはだかの建築は、居住者同士、そして地域の方々へとはだかのコミュニティを広げ、つなげていきます。

審査委員講評

共同住宅の住戸の中でも最もプライバシーの高さを求められる浴室を全部まとめて最もパブリックな場にするという大胆で新鮮な提案です。楽しいイラストとそれを論理付けようとする、挑戦によって可能性が見えてきます。個に属していると信じている部分をどこまではがせるか、今一度考えてみる大切さを感じました。